

兼久式土器分類試論

— 奄美大島マツノト遺跡出土土器を中心に —

中山清美
笠利町歴史民俗資料館

NAKAYAMA Kiyomi
Kasari Town Museum of History and Folklore

はじめに

兼久式土器は、6世紀から9世紀頃までの間、奄美諸島に特有に認められる土器である⁽¹⁾。兼久式土器は1974年、河口貞徳氏によって、以下の特徴をもつ土器型式として命名されている（河口1974、pp.37～38）。

- ・甕の頸部と胴部の境に、断面三角形をなす1条の突帯を水平にめぐらせ、突帯には刻目を施し、これに縦位の突帯を加えるものもある。
- ・平底で、底部に木葉痕をもつ。
- ・直線的な沈線文をもつ。

兼久式土器は、他の型式の土器を伴うことや、上下の層序をもつ遺跡からの出土が少ないため、編年が容易でなかったが、その後他の型式との前後関係を示す資料や、開元通宝や貝符との共伴などの情報が得られ、また¹⁴C年代測定値の蓄積などがあり、その时期的な位置づけにも根拠が得られるようになった。これに従い、兼久式土器は奄美地域に固有の在地土器であり、ヤコウガイの大量消費など特徴的な文化が存在したことも理解されるようになる。また、この時期の解明が奄美地域の古代の歴史に大きな意味をもつことが予想されるようになった。

兼久式土器は現在、200～300年存続したと予想されている。この間の兼久式土器の変遷を整理し、時間のものさしを作ることは奄美考古学の重要な課題ともいえる。

さいわい筆者の勤務する笠利町には兼久式土器を豊富に包含する遺跡が多い。なかでもマツノト遺跡の土器は質量ともに充実している。しかし1991年の緊急調査以来、出土遺物の膨大さと種々の原因で整理作業が遅延し、その正式報告は長い間の懸案事項となっていた。今回幸いにも報告書作成の経費を得、整理作業を実現する機会と共に共同研究という機会を得たので、兼久式土器の分類にとりくむことにした。

1. マツノト遺跡と出土土器の概要

マツノト遺跡は、奄美大島北部の笠利半島東部にあるサンゴ礁に面した砂丘遺跡のひとつである。マツノト遺跡には、砂丘の白砂層（無遺物層）をはさんで上の文化層と下の文化層があり、遺物の9割は上の文化層から出土している。上の文化層を第1文化層とよび、下の文化層を第2文化層とよんでいる。第1文化層の土器は兼久式土器を主体とするが、それより明らかに時期の新しい土器も含む。したがって第1文化層には相当長期間の遺物が混在しているといえる。これらは砂丘形成の過程で上のレベルの遺物が下のレベルの層に沈下してきた結果とも考えられる。第2文化層についても、新旧の時期が含まれると推測される。

さて、今回分析の対象としたのは第1文化層出土の兼久式土器である。第1文化層には大きくわけて3種類の土器が含まれていた。一つはその大半を占める兼久式土器（Ⅰ類土器）、兼久式土器にしばしば伴う兼久式土器以外の在地土器で、型式の定まっていない一群（Ⅱ類土器）、他はこれより明らかに時期の下る島外の土器（Ⅲ類土器）である⁽²⁾。以下、兼久式土器を対象に分類を試みることにする。

2. 分類の方法

マツノト遺跡出土の土器で1片の長さが3 cm 以上の土器片を選び⁽³⁾、兼久式土器の特徴の認められるものを選ぶと291点であった。これを対象に以下のように分類した。

分類基準としたのは、兼久式土器の定義である「断面三角形をなす刻目突帯」を規定する突帯の位置と刻目の有無を上位の基準とし、次に文様の位置を下位の分類基準とした(表1)。

分類1：突帯の位置が横位であるものと、これに縦方向あるいは斜め方向の突帯を加えるものに分ける

分類2：突帯に刻目のあるものとないものを分ける

分類3：沈線文が突帯の上にあるもの、下にあるもの、上下にあるものを分ける

表1. 兼久式土器の分類基準

突帯の位置	刻目の有無	沈線の位置 (突帯を基準)
横位	あり	上 下 上下 なし
	なし	上 下 上下 なし
横位 + 縦位・斜位	あり	上 下 上下 なし
	なし	上 下 上下 なし

3. 兼久式土器の様式

兼久式土器の定義は甕を対象にされたが、兼久式土器を定義とする刻目突帯を横にめぐらす壺や鉢が存在し、これが甕とセットになって兼久式土器を構成している可能性が高い。兼久式土器が甕と壺による一つの土器様式として成立することを、以下のように示したい。

図1は兼久式期の土器底部を分類したものである。土器の底部は大きく平底と特徴ある形状の丸底の2タイプがあり、平底にはくびれ平底が区別される。兼久式土器は、器形のわかる状態で出土することが稀で、これまでの資料で壺全体の器形のわかるものはほとんどない。ただ甕については全体器形を示す資料があり、これらが平底ならびにくびれ平底であることがわかっている。したがって壺は丸底に対応する可能性が高い。

図2はマツノト遺跡(第1文化層)と安良川遺跡(後出)の兼久式期の甕と壺の割合を、口縁部破片数によって示したものである。どちらにおいても、甕：壺が3：1の比率で存在していることがわかる。

図3は、マツノト遺跡と安良川遺跡の兼久式期における土器底部の構成である。安良川遺跡で丸底がやや少ないが、丸底：平底(くびれ平底を含む)の比率は、およそ3：1である。したがって甕は平底にほぼ対応し、壺は丸底にほぼ対応していることがわかる。

甕と壺は、食器としての機能を異にしていたことが予想されるが、この差は胎土にも示されている。

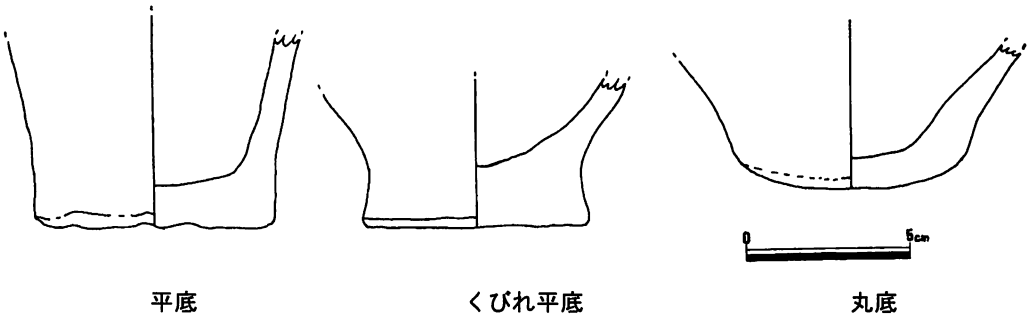


図1 兼久式土器の底部形態

甕は一般に砂質で混和材を多く含んでいるのに対し、壺の胎土は細かく、しばしば泥質でさわると粉が手につく質感がある。砂質と泥質の違いは明確なので、これによって胎土を2種類にわけ、甕と壺の胎土を示したのが図4である。甕は砂質、壺は泥質の傾向が明らかである。図5、図6はこれを底部で示したものである。平底を甕、丸底を壺に置き換えると、整合性があり、第4図の結果と一致する。

兼久式土器には甕と壺のほかに鉢も伴っている⁽⁴⁾。ただ例数が少なく、その存在比を壺のように示すことはできない。

兼久式土器は甕と壺が3：1の割合で組み合わせ、これにわずかな鉢の伴う一つの様式として理解することができる。

4. 兼久式土器の分析

表1の基準にもとづき、兼久式土器の出土した遺跡について分析をおこなう。分析対象としたのは、マツノト遺跡、泉川遺跡、長浜金久I遺跡、用見崎遺跡、フワガネク遺跡、安良川遺跡である。これらは、分析対象の兼久式土器が15点以上得られている遺跡である。マツノト遺跡では表2と表3に、その他では表3に結果をまとめた。

(1) マツノト遺跡

マツノト遺跡における兼久式土器は第1文化層で集中的に出土しているが、この下に続く無遺物層である白砂層からも少数出土している。表2ではこれも分けて示した。砂丘では、このように無遺物層から単発的に遺物がみつかることがしばしばある。

マツノト遺跡における兼久式土器の主流はAエd（横貼付突帯文に刻目を有する、図7-3.4）土器で次にAエa（刻目横貼付突帯文上に沈線文を有する、図7-1）が続くことがわかる。

(2) 泉川遺跡

泉川遺跡は1985年から86年にかけて鹿児島県教育委員会によって調査された遺跡で、長浜金

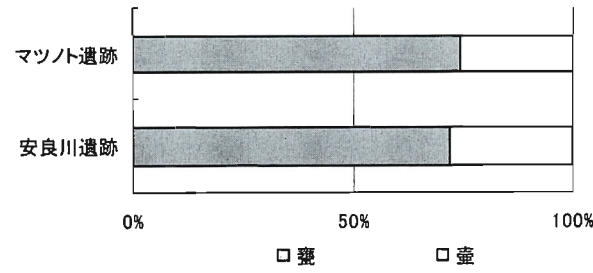


図2 兼久式土器の甕と壺
(マツノト 848 点、安良川 235 点)

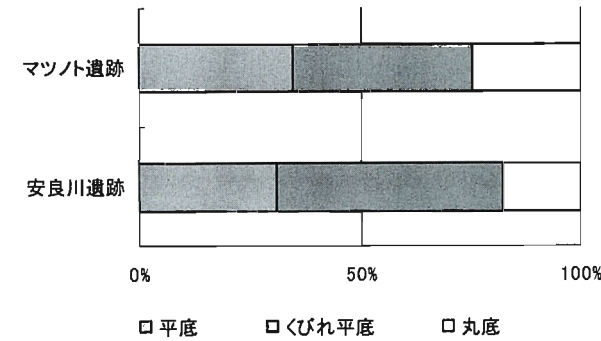


図3 兼久式土器の底部形態
(マツノト 350 点、安良川 155 点)

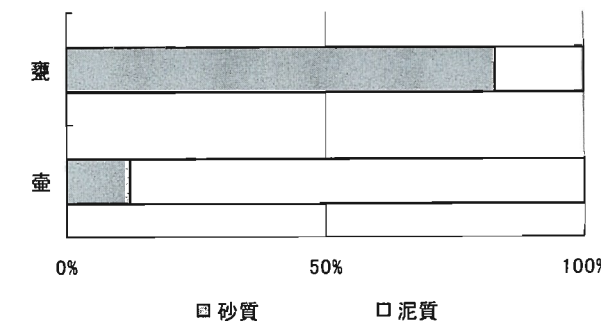


図4 兼久式土器の器形と胎土の関係
(安良川遺跡 232 点)

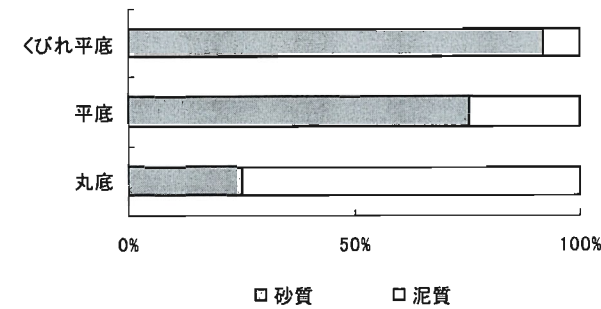


図5 兼久式土器の器形と胎土の関係
(マツノト遺跡第1文化層 350 点)

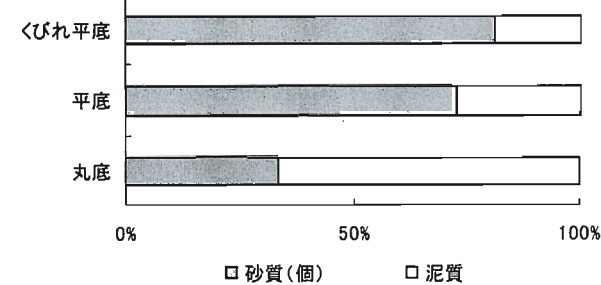


図6 兼久式土器の器形と胎土の関係
(安良川遺跡 155 点)

久遺跡群の北200mに続く砂丘地に立地している。砂丘の東側は小規模な河川で分断され、マツノト遺跡や安良川遺跡と共通した立地である。遺物は3層で出土し、兼久式土器のほかに敲石、石皿、貝錘、貝刃などがある。

兼久式土器とともに、須恵器壺、9世紀前後とみられる土師器も出土している。土器数は多くないが、Aオの割合が他より多いことが注意される。

(3) 用見崎遺跡

用見崎遺跡は1994年に笠利町教育委員会、1995年～1997年に熊本大学考古学研究室が発掘調査を行っている（笠利町教育委員会1995、熊本大学文学部考古学研究室1996、1997、1998）。1994年に調査を行った資料は翌年の調査資料と接合したものもあり、報告書

表 2. マツノト遺跡の兼久式土器

突帯の位置	刻目の有無	沈線の位置 (突帯を基準)	第1文化層	白砂層	白砂下層	小計
A. 横位	エ あり	a 上	31	1	1	33
		b 下		2		2
		c 上下	19			19
		d 沈線なし	70	3	1	74
	オ なし	a 上	1			1
		b 下				
		c 上下	1			1
		d 沈線なし	11			11
B. 横位 + 縦位・斜位	エ あり	a 上	2	1		3
		b 下	2			2
		c 上下				
		d 沈線なし	1	3		4
	オ なし	a 上				
		b 下				
		c 上下				
		d 沈線なし	5			5
		小計	143	10	2	155

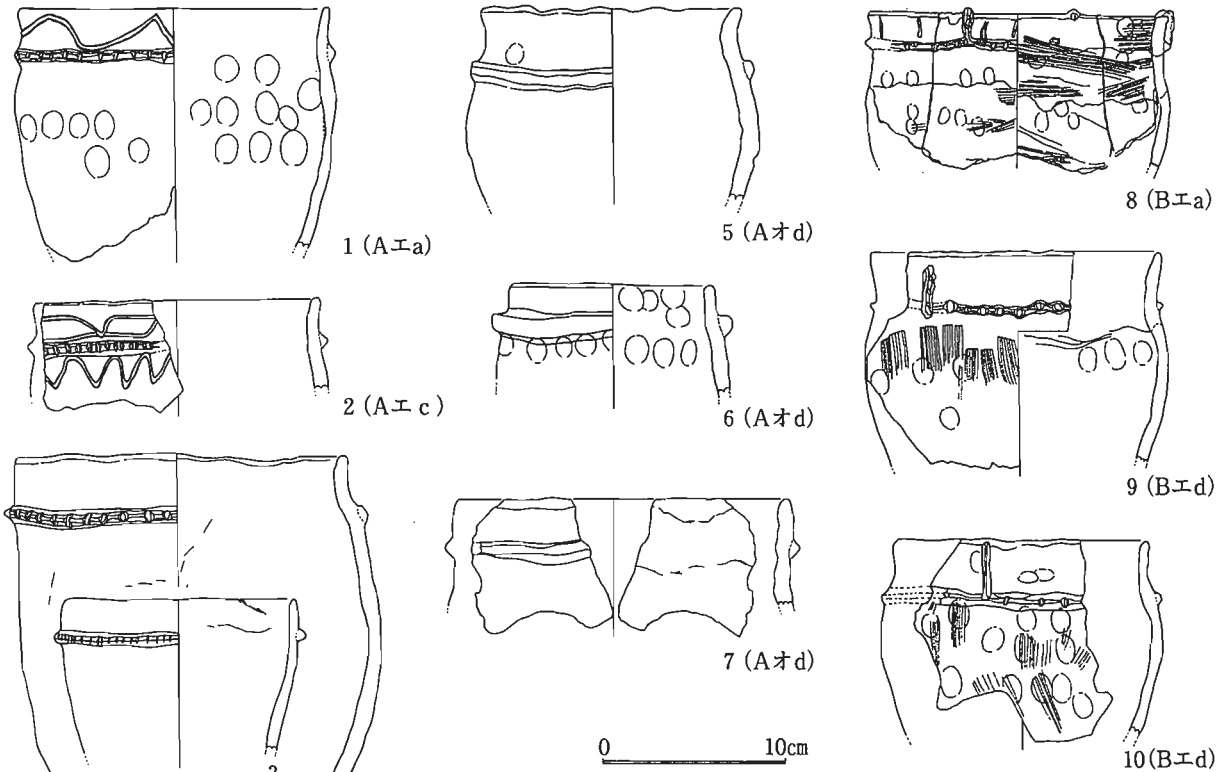


図 7 兼久式土器（マツノト遺跡）
 1. 横位突帯・刻目あり・上沈線、2. 横位突帯・刻目あり・上下沈線、
 3.・4. 横位突帯・刻目あり・沈線なし、5・6・7. 横位突帯・刻目なし・沈線なし、8. 横位＋縦位突帯・刻目あり・上沈線、9・10. 横位＋縦位突帯・刻目あり・沈線なし

の中で同じ資料を扱っているため、重複を避けて1995年～1997年の資料を合計した数でデータを作成した。

用見崎遺跡の兼久式土器はA類が主流を占めている。A類の中でも刻目を有すのみのAエdが多く、次に刻目突帯の上に沈線文を施すAエa、沈線文を刻目突帯上下に施すAエcになる。主流の土器はマツノト遺跡のものと共通する。

なおデータには1995年に出土した完形に復元できた甕（Bオd）を破片数3として加えている。

（4）長浜金久I遺跡

長浜金久一帯の砂丘地は奄美空港建設に伴い大規模開発が行われた（鹿児島県教育委員会1985）。兼久式土器を出土する遺物包含層は9層、13層、19層の3層であり、19層から多くの資料を得ている。弥栄久志は19層の遺物包含層から放射性炭素測定（ $1120 \pm 20 \text{B.P.Y}$ ）絶対年代 AD830～890の測定結果を得て9世紀に位置づけている。砂丘はクロスナ層が数枚確認されており兼久式土器の時間差を表す資料としても注目される。

遺物は報告書の実測図をもとに分類した。長浜金久Iの兼久式土器はマツノトのそれと類似するがB類が含まれていない点に注意される。

（5）フワガネク遺跡

フワガネク遺跡は名瀬市教育委員会によって発掘調査が行われ、2005年に1次調査と2次調査の土器を主体とする調査報告書が刊行されている（名瀬市教育委員会2005）。フワガネク遺跡群はその地形と砂丘の形成から数回の砂丘形成が行われていることが、これまでの出土遺物や調査報告からも知ることが出来る。砂丘形成や土器との関係、貝製品、鉄、滑石、石器、カムイヤキ等の出土遺物はマツノト遺跡と共通するものがある。

これまでフワガネク遺跡の資料は高梨修の論文や研究発表、単行本に引用されている。今回引用した資料は調査報告書に掲載されている1次調査46点、2次調査271点の資料から分類基準に対応する土器である。出土遺物の数は1次調査区11からは722点、2次調査では兼久式土器大量出土として17324点が出土していると報告されている。甕と壺の比較は第1次調査において甕形土器33点、94%。壺形土器2点、6%で第2次調査において甕形土器185点、94%。壺形土器12点、6%と報告され、壺形土器が著しく少ない数値をあらわしている。

1次調査の兼久式土器出土層位は調査区9においてIV層からの出土である。調査区11においてもIV層からの出土である。調査区11は4層がa b cに分けられているが、土器との具体的な対応ができなかった。報告書に掲載されている資料はマツノト分類基準で分類を行った。その結果、フワガネク出土土器の主体は刻目突帯を有し、刻目突帯の上に沈線を有するマツノトA類（Aエa）が圧倒的であることがわかる。その次に刻目突帯を有し、突帯上下に沈線文を施すマツノトA類（Aエc）と無文土器になっているのがフワガネク資料の特徴ともいえる。

表 3. 兼久式土器分類別出土データ

突帯の位置	刻目の有無	沈線の位置	マツノト	泉川	長浜金久I	用見崎	フワガネク	安良川
A. 横位	エ あり	a 上	33		6	12	97	9
		b 下	2	2	1	3	1	2
		c 上下	19		6	11	32	9
		d なし	74	6	25	18	22	27
	オ なし	a 上	1	1				
		b 下			1			
		c 上下	1					
		d なし	11	5	2			3
B. 横位 + 縦位・斜位	エ あり	a 上	3			3	3	1
		b 下	2				1	
		c 上下				2	5	
		d なし	4	1		1	1	1
	オ なし	a 上						
		b 下						
		c 上下						
		d なし	5			3		
小計	487		155	15	41	53	162	52

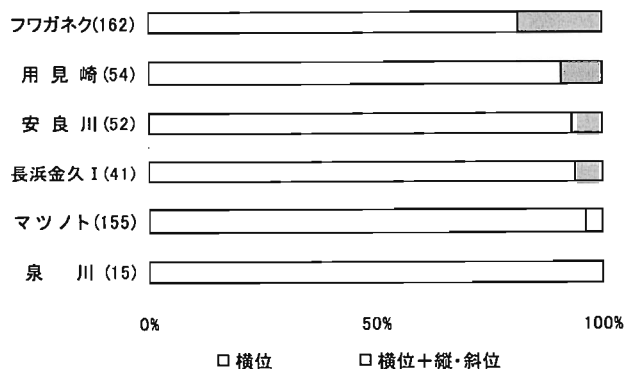


図8 兼久式土器の突帯の位置 (479 点)*
※出土点数

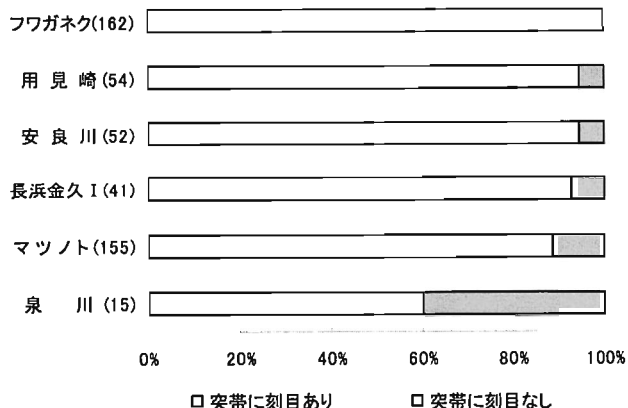


図9 兼久式土器の刻目突帯の有無 (479 点)

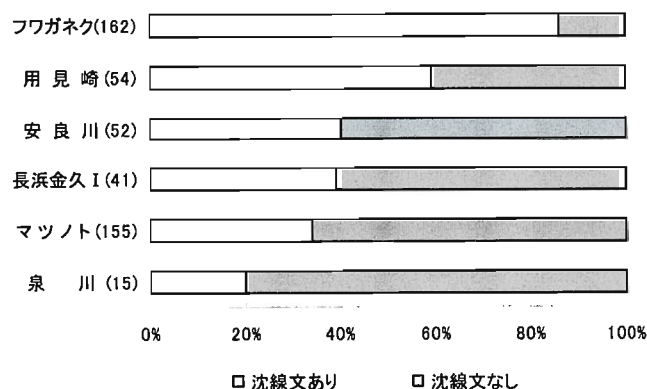


図10 兼久式土器の沈線文の有無 (479 点)

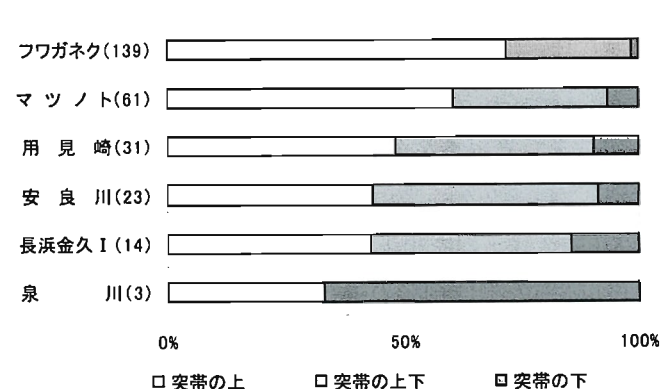


図11 兼久式土器の沈線文等施文位置 (268 点)

(6) 安良川遺跡

安良川遺跡は2003年に笠利町教育委員会によって発掘調査が行われた（笠利町教育委員会2005）。笠利町東海岸北部に位置している。遺跡は兼久式土器を主体にスセン當タイプを含む単純遺跡である。

安良川遺跡土器分析結果は、主流をなす土器がマツノト分類Aエdであり、無文土器の数もマツノト遺跡と共通する結果を得ている。

5. 検討

(1) 遺跡間の比較

マツノト遺跡を初めとする6遺跡について、表3をもとに突帯の位置、突帯の刻目の有無、沈線の有無、沈線の施文位置について比較してみた。図8～図11がその結果である。4種類のグラフについて、いくつかの共通点を指摘することができる。すべてのグラフにおいて、フワガネと泉川はそれぞれ対極に位置し、その他の遺跡がその中間に並ぶ点は注目される。また図8～10に示した兼久式土器の突帯の位置、沈線文の有無、刻目突帯の有無についての変化では、フワガネ⇒用見崎⇒安良川⇒長浜金久I⇒マツノト⇒泉川の序列が同じで、共通した変化の方向を認めることができる。しかし、図11に示した施文位置については、中間の3遺跡の序列がマツノト⇒用見崎⇒安良川となり、先の3要素の変化と一致しない。

ところで、フワガネ、用見崎、安良川、長浜金久I、マツノトの各遺跡においては兼久式土器に伴符が伴い（安良川では無文貝符）、用見崎以外の遺跡では本土産須恵器あるいは土師器が伴い、泉

分類	A. 横位 突帯				B. 横位突帯 + 縦位・斜位突帯							
	工. 刻目のある突帯				オ. 刻目のない突帯							
	a. 沈線が突帯の上	b. 沈線が突帯の下	c. 沈線が突帯の上下	d. 沈線なし	a.	b.	c.	d.				
第 1 文化層												
白 砂 上 層												
白 砂 層												
白 砂 下 層												

マツノト遺跡の主流の土器

図11 マツノト遺跡出土の兼久式土器

川以外の各遺跡で鉄製品が出土している。これらとの共伴関係を厳密に検討し、図8～11に示した土器の特徴について、真に時期的変化を示すものが何であるのかを慎重に選別する必要があるだろう。

(2) マツノト遺跡からの見通し

マツノト遺跡では、第1文化層の下の白砂層からも数点の兼久式土器が出土している。白砂層は安定した層ではないが、兼久式土器の先後関係を考えるヒントにはなる。これを図11に示した。刻目をもつ横位突帯、横突帯に縦方向の突帯が組み合うタイプ、沈線文が突帯上につけられるタイプ、沈線文のないタイプが早く登場していることがわかる。

まとめにかえて

マツノト遺跡第1文化層出土の兼久式土器を対象に、奄美大島の6遺跡473点の兼久式土器を分類し、以下を指摘した。

1. 兼久式土器は、甕、壺、鉢が組み合う一つの様式をなしている。甕と壺は3：1の比で存在するが、鉢は希少である。
2. 甕・鉢と壺は、その胎土を意識的に使い分けて作られている。甕・鉢は砂質、壺は泥質の胎土が多い。
3. 兼久式土器は、刻目突帯をもつことを第一の特徴とするが、突帯に刻目をもたないものも少数存在し（図7-5, 6, 7）、今回はこれも兼久式に含めた。兼久式土器の文様は沈線文を主体とするが、これを欠くものも相当数ある。文様は突帯の上に施すものと、上下または下に施すものがある半ばしている。
4. 兼久式土器を、突帯の位置、突帯の刻目の有無、沈線の有無、沈線の施文位置について分析し、遺跡ごとに比較して、早晚の序列化を試みた。

(注)

1. 北は奄美大島から南は与論島にいたる地域に分布が確認されている。
2. 1辺の長さが3 cm以上の土器片を対象に分類したところ、Ⅰ類土器は291点（51%）、Ⅱ類土器は205点（37%）、Ⅲ類土器は18点（3%）、不明38点（7%）であった。
3. 兼久式土器の突帯の位置について統計をとったところ、口唇部から3 cm以下についているものがほとんどであった。したがって、1辺の長さが3 cm以上の土器片であれば兼久式土器か否かの判断ができることになる。
4. 長浜金久Ⅰには刻目突帯をもつ鉢（鹿児島県教育委員会1985、29頁26）やこれに対応するとみられる木葉痕のある底部も検出されている（同35頁、119など）。

(文献)

- 河口貞徳 1974「奄美における土器文化の編年について」『鹿児島考古』9号鹿児島県考古学会
鹿児島県教育委員会 1985『長浜金久遺跡』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書（32）
鹿児島県教育委員会 1986『泉川遺跡』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書（39）
笠利町教育委員会 1995『用見崎遺跡』
笠利町教育委員会 2005『安良川遺跡』笠利町文化財報告27集
熊本大学考古学研究室 1996『考古学研究室報告』第31集
1997『考古学研究室報告』第32集
1998『考古学研究室報告』第33集
名瀬市教育委員会 2005『小湊フワガネク遺跡群Ⅰ』名瀬市文化財叢書7